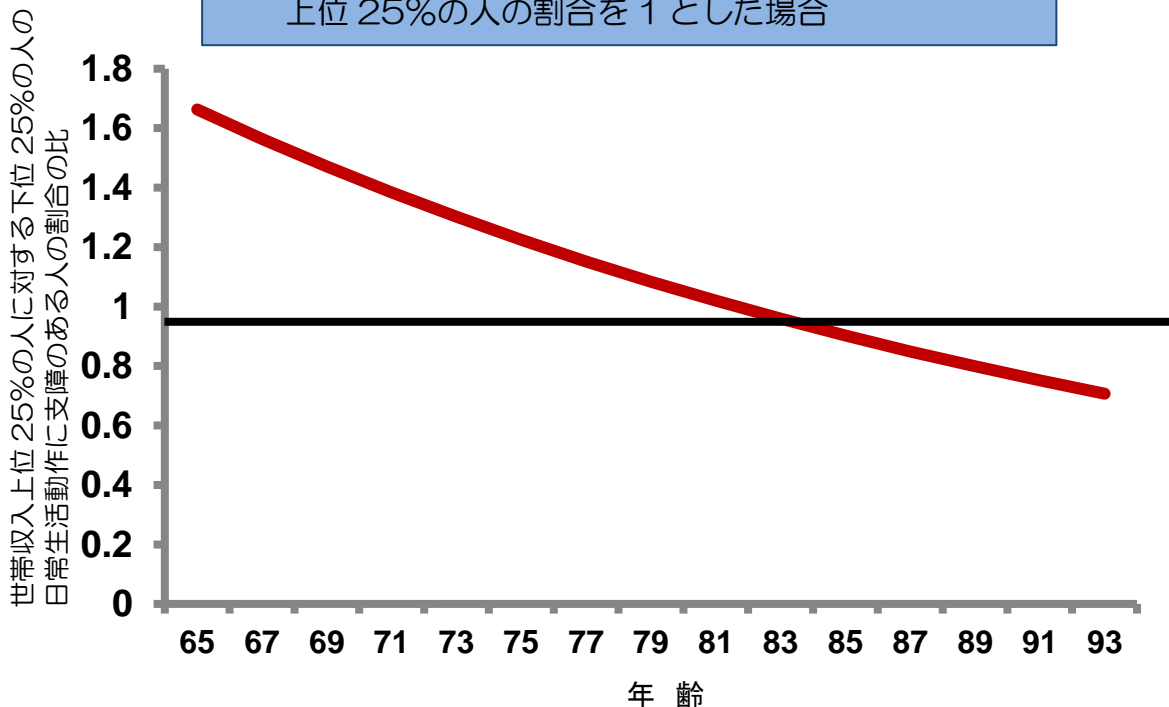


コラム1：日本では、高齢者の健康度は社会階層によって異なるのか？

日本では、体の調子が悪くなったり、病気になった場合、誰でもあまりお金のことを気にせず医療機関にかかることができます。そのため、学歴や収入などの社会階層によって健康度にあまり差がないのではという見解もあります。しかし、高齢になるに伴いその格差は縮小する傾向にあるものの、高齢者でも社会階層による健康格差がかなりあることが明らかになっています。

健康指標として、高齢者の場合、衣服の着脱、食事、トイレにいて用を足すなど日常生活動作を支障なく行うことができるか否か、すなわち日常生活動作の自立度がよく用いられます。以下に示した図は、日常生活動作の自立度が高齢者が属する世帯の収入によってどの程度異なるかをみたものです。65歳の人でみると、世帯収入が下位25%の人では上位25%の人と比較して、日常生活動作に支障のある人の割合が1.7倍高く、高齢者の日常生活動作の自立度は収入によってかなりの格差があることがわかります。加えて、興味深いのは、高齢者の中でも年齢が高くなると、その割合の差は縮小し、80歳位以上では収入が高い高齢者の方がむしろ日常生活動作に支障のある人の割合が高くなることです。このような逆転がなぜ起こるのでしょうか。収入が低い人では若くして疾患に罹患し、日常生活動作に支障をきたしやすいと思われる。日常生活動作に支障のある人では死亡リスクが高く、80歳以上まで生きることが難しいことから、その結果として、80歳以上の高齢者で収入が低い人の場合、日常生活動作に支障の少ない、元気な人が生き残っているという理由が考えられます。

図：年齢別にみた日常生活動作に支障のある人の割合の世帯収入上位25%と下位25%の人たちの比較：上位25%の人の割合を1とした場合



注) 1 よりも大きな値は、世帯収入が下位25%の方が上位25%の人よりも日常生活動作に支障のある人の割合が高いことを意味している。